

乳児期の遊びに関する考察

Considering the Infant's Play

菅野 幸宏*

Yukihiro KANNO*

【論文要旨】

子どもの遊びの発生と発達を具体的な状況の中で見出していくことをめざしてビデオ録画されたある家庭の乳児の遊びを分析した。乳児前期には対人的な遊びが多く、後期になって物に関わる遊びも加わり、遊びの種類が豊富になったが、この後期に「物を渡すかに見えて渡さない」遊びが見られたことは興味深い発見であった。この遊びを後の形態の遊びである象徴遊びとの関連で検討し、親子遊びの意義を考察した。

キーワード：乳児期，親子の遊び

目 的

遊びはいつどのように発生し、発達していくのであろうか。先行研究によれば遊びは乳児期早々に発生するようである。例えば、Piaget, J. (1945)⁵⁾ においては生後1ヶ月以内でも見られる空吸い(食物なしに行われる吸い)が遊びの起源とされている。以下この「感覚運動遊び」の発達を辿ってみる。

感覚運動遊びとは、「満足をもたらす活動を偶然発見することから始まり、そうすることがただ喜びであるために連続的に反復される活動」を指している。この遊びの発達をとらえるにはPiaget (1945)⁵⁾ の循環反応(第1次～第3次)という概念が有益である。第1次循環反応の遊びは、自己身体に向けた活動をただそうする楽しみのために反復する活動(ひっかいたときの感触を楽しむためにシーツや母親の身体をひっかくなど)であり、これは1～4ヶ月頃に見られる。第2次循環反応の遊びは、環境に対する効果を喜んだり、それに満足を感じる活動の反復(テーブルを繰り返し叩くなど)であり、これは4～8ヶ月頃に見られる。第2次循環反応は、活動が特に自己身体に向けられてはいない活動の反復を含み、自分の行為が外界に与えた効果に明確な関心がある。第3次循環反応の遊びは、遊び経験をより面白くするために即座にかつ意図的に行為をこみ入らせる活

動である。興味ある事象には、より面白くするため、反復でなく多様な意図的変化がもたらされる。しかし、この遊びは1歳過ぎの出現が普通である。その直前の8～12ヶ月には意図的、目標指向的行動が出現するが、その際目標を達成する手段であったものが目的化され、当初の目標が放棄されるといったことが生じる。この目的化された行動はそれ自体が面白く感じられる活動であるから遊びである。以上にみたように循環反応では、最初何らかの行為とある事象との関係が発見される。それ自体は知的なことであるが、それが面白い、満足的と感じられることによって反復される時には遊び化が始まっている。つまり、遊びは知的行為から派生したものと言えよう。当初の目標を忘れて手段的行為を自己目的化する遊びも派生的である。矢野(1996)⁸⁾ はこのような遊びを逸脱遊びと呼び、「逸脱」は遊びの発生の端緒であり、遊びから新たな活動が発生する契機でもある、と意義づけている。

Hughes, F.P. (1991)³⁾ は乳児期の遊びとして以上の他に「対象操作の遊び」を挙げている。この遊びは、乳児の注意の焦点が自己身体から外界の事象に移ることと遊び材料を掴み、いじるための運動技能の獲得が前提となるから3ヶ月頃までは出現しないと見られる。4ヶ月半頃までには目と手を協応して物に手を伸ばすことができ始め、膝の上に座ると手でテーブルの端をいじり始める。

*弘前大学教育学部幼児教育学科教室

Department of Preschool Education, Faculty of Education, Hirosaki University

こうして5ヶ月頃には物での遊びに熱心になる(積木、ひも、紙切れ、スプーン等を叩いたりする)。移動可能になる6ヶ月頃には指でつまんだり、物と物を一緒にするようになってくるが、8ヶ月頃までは遊ぶ物自体にはあまり興味がなく、物はそのとき好む活動を実行するための支えという性格が強い。9ヶ月頃からは物の特性に注意深くなり、熟知した物より新奇な物に興味が強まる。いじるときに物の特徴に応じるようになり(形に特徴がある物は回転させ、肌理に特徴がある物は指でなでる等)、10ヶ月までには本の中の絵を見るようになる。12ヶ月を過ぎると遊具の機能に適切な使い方が増える(受話器を耳に当てる等)などの変化がある。

以上の他にはどのような遊びが予想されるだろうか。従来あまり強調されていないが、対人的な遊びが挙げられよう。養育者との社会的相互作用が乳児の発達上大きな意義をもっていることはすでに多くの研究が示すところであるが、この社会的相互作用の中に遊びが含まれている。対人的な遊びはどのように現れ、発達していくのであろうか。ここでは親子の遊びとして考察していく。

先ず、親と子の双方が関わる遊びは純然たる乳児の遊びとは言いがたい面があるから、親子遊びを明確に規定する必要が生じる。これについて戸田(1996)⁷⁾は「場を共有し、相互的に関わり、乳児とやりとりしている時に、母親の行動に遊びの特徴が見られ、これに乳児が機嫌よく応じている活動を言う」と規定している。また、その際の遊びの特徴としては高橋(1984)⁶⁾から「自由で自発的」、「面白さ、楽しさ、喜びの追求」、「そうすること自体が目的」、「積極的な関わり」、「他の日常性から分離、隔絶」、「非遊び的活動に対する一定の系統的な関係」を引用している。これらのうちの多くの特徴が重ねて見られる活動ほど遊び的と見なされよう。

戸田(1996)⁷⁾によると母子遊びは、玩具を介さず、相互のやりとりを遊びに変化させた「社会的遊び」と「玩具を介した遊び」に大別される。前者には、①声と声、表情の楽しいやりとり(1, 2ヶ月に出現)、②声の遊び(アババ等、演示と手を添えた模倣を含む; 自己発声を楽しむ頃)、③顔の遊び(イナイイナイバア等)、④身振りの遊び(チョチチョチ、バンザイ等)がある。後者には、分担の遊び(子が玩具を放り投げて音を聞く-親が玩具を拾って渡す~以上の反復等)、模

倣の遊び(親が玩具を振って見せる-子も玩具を振る等)、交代の遊び(親が玩具をさし出す-子がうけ取る-子がさし出す-親がうけると等; 交代ができる頃から)といったものがある。なお、分担の遊び、交代の遊びという名称は著者が便宜的に付けたものである。

以上、乳児期に出現が予想される遊びの種類について見てきた。本論ではこれらを土台として乳児の遊びの発生と発達についてより具体的に検討していくこととした。

方法

資料: 使用されるのは、家庭で撮影されたビデオ録画である。撮影は主として対象児の父親Fによるものである。Fは、第1子A、第2子Bのときも不定期にビデオ撮影を行っていたが、第3子Cの誕生を機により定期的かつ長期的に撮影することにしたのである。内容は家族の交流や遊びが中心である。諸般の事情により完全に定期的な撮影とはいかなかったのであるが、ある程度の間隔で生後1ヶ月から7歳頃まで撮影している。年齢が上がるにつれ行動範囲が広がり、遊びも家庭外で行われることが多くなったので、年長になるほど撮影頻度が低下しているが、これは止むを得ない。この資料については、ある特徴を持った行動がどのような具体的状況で生じたか等について詳細な情報を与えてくれることが期待された。必要に応じてCの母親Mの育児日誌も活用したい。

対象: 観察対象は、第3子C(女児)である。発達上特に問題は生じなかった子と見られる。

撮影手順: ビデオカメラは居間に常設されていて、遊びが生じた場合や普段の生活ぶりから見て遊びが生じやすい状況になった場合、直ちに撮影が開始された。撮影者はほとんどの場合父親Fであるが、不在の時はMが代行した。

撮影期間: 今回扱うのは出生(昭和62年4月)から満1歳直前までの録画である。

撮影場所: 青森県弘前市内にある著者の家庭で撮影された。なお、途中で1回転居している。

結果と考察

1 乳児期前半(0~5ヶ月)

これより月齢順に結果と考察を示す。以下の“V1(0;25)”はビデオ資料番号1番の資料で0ヶ月25日に録画されたことを表す。その他も同様とする。なお、1ヵ月を30日として計算し

た。

V 1 (0 ; 25) ■内容：沐浴－授乳－睡眠の場面。◆考察：母親Mは育児に必要な世話行動に終始している。Mからの話しかけはあるが、遊戯的な意図は見られない。

V 2 (2 ; 6) ■内容：周囲にAたちがいてやや騒々しい。CはMに向かい合わせに抱かれており、側にいたBを目で追う。その後、MがCに「ばあ（穏やかに）」、「C（音を引き延ばして名を言う）」、「はあ～あ（高い声）」と声をかけると、CはMの顔を見て、口を動かし、舌を出す。生き生きした表情に見える。◆考察：Mの働きかけは必要な世話行動ではなく、Cを覚醒させ、快適な状態を生み出そうとして自由に選ばれたものであるから遊びの特徴がある。これに対するCの反応は生き生きとしていて、機嫌が良さそうである。親子の社会的遊びかどうかの区別は微妙だが、「声と表情の楽しいやりとり」の萌芽的形態と見ておきたい。

V 3 (3 ; 16) 1 ■内容：Fが膝を立てて仰向けになり、Cを膝に寄りかかるよう座らせる。両者は向かい合わせ。FがCの両腕をつかみ、「どんどんどん」とリズムカルに腹太鼓をさせ、笑いかけるとCも笑顔になり、Fが笑い、Cも笑う。再びFが「どん、どん、どんどんどん」と腹太鼓をさせると、両者顔を見合わせ、発声し合い、掛け合い状態となる。また腹太鼓をさせると、Cは笑い、発声が増え、Fと掛け合い状態になる。この後「腹太鼓－Cの笑い」が2回、「てんてん－Cの笑い」が2回続いた。（てんてん：てんてんと言いつつCの手でその頭を突く動作）。◆考察：Fの働きかけに遊戯の特徴があることは明らかである。それはCの笑いと発声を引き起こし、楽しい雰囲気を生み出した。これは「声と表情の楽しいやりとり」である。

2 ■内容：Cがクッションによりかかり、ミルクを飲み終わった所。Fが「おめでとうございませう。完成です。」と話しかけ、顎を布で拭く－C「はーあ」と笑顔になり手足を動かす；Fが笑顔で「あー、一等」とCの両手をバンザイのように上げる－Cが笑う；F「おめでとうございませう。一等です。」－またCが笑う；Fはうなづくようにして「一等です」とし、「はい」とCの手を頭に付ける－Cが乗り出してきて、発声が増える；F「べろべろ」と舌をだす－Cが体をよじるようにして発声する；F「べろべろ」と舌をだす－C

は右手を振り、発声が増える。／48″後／Fが舌を出す－Cはしきりに発声する。◆考察：前半、Fはミルクを飲み終わったことを大げさに讃えて話しかけ、その上動作をさせるという明らかに遊戯的な関わり方をしている。この関わり方はCの興味を引き、快感情を伴う笑いや発声を引き出した。Fの言葉は明らかにふり意識を持ったものである。Cは言葉の意味は分からなくとも面白そうな雰囲気や遊びへの誘いを感じ取ったであろう。「声と表情の楽しいやりとり」に該当する社会的遊びである。後半、Fがべろべろと舌を出し、Cが発声で応えるという相互作用パターンが見られた。Cの反応には興奮した様子が見られるが、笑いは見られていない。情動的なコミュニケーションではあるが、遊びとしての特徴は薄い。

V 4 (4 ; 14) 1 ■内容：Cがラックに座り、左手に布巾を持ってしゃぶり、右手にリングチャイムを持っている。FはCと向き合い、短く区切って話しかけつつCの足を掴んだり動かしたりする（むちむちと言っては大腿部を掴む、堅太りと言っては腕を掴む・腹や頬も）－Cはじっと見て心地よさそうに発声し、うっとりした笑顔になる。◆考察：Fが話しかけている内容は現実のことであるが、話し方がゆっくりとして大げさであり、身体接触がリズムカルに随伴していた。これに対してCは働きかけを受けているという印象を強く感じたのであろう、心地よさそうにうっとりした笑顔を見せた。Fの関わり方は自由に選ばれたもので、Cとの交流を楽しもうとしているから遊戯的と言ってよい。一方、Cの応答はやや受動的だが、満足的である。これは「声と表情による楽しいやりとり」であろう。

2 ■内容：Mが少し離れてCと対面している。Mが「ばおーん・ばおーん・」と高音で発声している－Cは何事かという顔でじっと見る－M「きっ、きゃっ」と声をかける－Cは笑顔になる（口を開け手足が動く）。その直後Mが「んきききき」とCに顔を近づけた（この働きかけは計6回に及んだが、初めの2回ではCがはしゃぎ、次の2回は見ているだけ、最後の2回は、口を開け笑顔になる、少し間を置いて手足を動かす、という反応になった。◆考察：Mの「んきききき」という働きかけはCにコミュニケーションを始めるサインと受け取られ、喜んで受け入れられた。Cからの反応があった時となかった時があったのはMの働きかけるテンポが速かったからではないかと

思われる。恐らくMのテンポにCが追いつけなかったのである。多少ぎくしゃくしているが、「声と表情による楽しいやりとり」であろう。

V5 (5; 1) 1 ■内容：C (仰臥位) の背後にFがいる。Fがリングチャイム (R) をCの右手、カニのガラガラを左手に持たせる - CはRを口に入れる ◆考察：Rは振るよりしゃぶる対象となっているが、対象操作の遊びと見ておきたい。

2 ■内容：Fは仰向けのCに直面している。CがFを見て「うああああ」と発声する - Fも「きききききき」と応じる；さらにCが「えうおーおーおー、おーおーおー」 - FもCの腹を撫で「おーおーおー」、「えーおーおーおーおーおー」と応える；F「いくぞ、ぴーっ」とCの両手をその両頬に押しつけるようにする - Cが笑顔になる (その様子を見てAが笑っている)；同じことをもう2回する。反応も同じである；Aがビデオカメラを見ながら「C」と呼ぶ - CがAの方を向く；FがCの右手をRに向けて突き出すようにして「パンチ、パンチ」と言う - Cはまたも笑顔である。 ◆考察：前半のCとFの発声の交換については、Fに遊戯的態度があり、Cの発声も生き生きしているから「声と表情による楽しいやりとり」に含めてよいであろう。後半、FがCに遊戯的動作 (Cの両手をその両頬に押しつける、Cの右手をパンチのように突き出す) を行わせ、これにCが笑顔で応じた場面も「声と表情による楽しいやりとり」と見られる。遊ぼうとする意識がFにあり、Cはその働きかけを快く受け入れているからである。

II 乳児期後半 (6～11ヶ月)

V6 (6; 2) 1 ■内容：Cがリングチャイム (R) を両手で持ち、口に入れようとしている。Fが5回ほど唇で音を出す。CはFを見て、Rをくわえながら「へええ」と笑い、右手でRを動かす。 ◆考察：唇で音を出すという遊戯的な働きかけが、Cの笑いを引き出した。育児日誌に「(唇で音を出す) 見えない所でやってもニヤッと笑い、音の方向を見ようとする (4; 23)」とあるように、この音自体は早くから耳にしているから新奇性があるとは考えにくい。Cが笑ったのはその音を出している人から遊びへの誘いを感じたからであろう。「声と表情の楽しいやりとり」と見られる。

2 ■内容：Cは左側に寄りかかりRをくわえて

いる。「ふふ、んー」の発声がある；FがCに「わうわうわう、わ! (!の前の音は強い音)」と音声を聞かせ、Cは「へへへ」と笑顔でいる。Fは同じ働きかけをさらに3回行うがCの笑顔は引き出せない；しかしその次に「わうわうわう、わ!、わ!!」と初め低く、最後を高く言うとCが笑顔いっぱいになる (「うん」)。以後最後の音を「低く」、「高く」、「高く」していずれもCの笑顔を引き出した。その後4回ほど試みがあった。 ◆考察：Cは全体として機嫌よく応じているものの、Fの働きかけにある程度探索的な性格が見られるから遊びの性格は稀薄化している。しかし、どちらかといえば「声と表情による楽しいやりとり」と見られる。

3 ■内容：C (仰臥位) の右手がティッシュの箱の取り口を持っている。箱には何か入っていて動かすと音がする；Cは箱を口に持っていき、それから上下に箱を6回振って音を出す。箱を見て笑顔になり、発声すると箱から手が離れる；FがCの右手を箱の中に入れてやると「がらがらがら、がらがらがら」と音がして、Cは箱を振る。 ◆考察：ティッシュの箱はガラガラのようにになっている。Cはこれを振って楽しんでいるが、Fの関わりはこの一人遊びを促す程度のものである。よって、これは「ティッシュの箱 - 振る - ガラガラと音がする」という関係に興味を持ったCの第2次循環反応の遊びである。

V7 (7; 4) ■内容：ラックに寄りかかって立っている。Mを見てCが「あ、あ、あ、あー」と (ラックのテーブルに置かれた) 箱形遊具を叩いて音を出す (足が時折曲がる)；Mが箱形遊具に手を出すとその顔を見て「あああああ」と笑顔になる；Mが遊具の回転部を回すとCも回転部を叩いたり回したりする。それから回したり鐘を鳴らしたり叩いたりしてから「うええ、あうう、うえ」と移動したそうにする。 ◆考察：MとCは共に箱形遊具に働きかけているが、Mは遊具に注意を集める程度の関わりであり、Cもやや不安定に立っている状態である。対象操作の遊びと模倣の遊びの特徴があるが、遊びとしての性格は薄い。

V8 (7; 29) 1 ■内容：Cが大きなダンボール箱に寄りかかって立っている。Cは (箱の上にあった) リングチャイム (R) を掴み、2, 3回叩きつけ、しゃぶり「えーえあえ」と音を出す；次第に左へ傾き、箱ごと斜め後ろへ転んでいく (Fがうけとめる)；再び、CがRを持ったま

まくわえ、這いの姿勢から段ボール箱によじ登って立つ；Fが紙を丸めてCの尻を軽く叩く；Cは段ボール箱に体重をのせて箱を前へ動かしていく（足首がまだ不安定）；2歩3歩と押していき、「あてー、あー」と力の入った声を出す；壁まで押して、右方に注意する。◆考察：前半、ダンボール箱によじ登って立ち、目当てのRを手に入れ、叩く、しゃぶるというやり慣れた扱いをした後で、バランスを崩す。ここには対象操作の遊びが出現しているが一瞬である。後半では、箱によじ登ること自体に興味があったようで、CはRをくわえながら箱によじ登った。そして箱によりかかり押していったが、これは自然に進んだというより力を入れて押したように見える。Fとの関係は目立たない。これは対象操作の遊びである。なお、この遊びでは次の解釈ができるかも知れない。それは、当初CはRを取るための手段として箱によじ登ったが、その目的が果たされると、今度はそれまで手段であった箱に興味に移り、この遊びが生じた、という解釈である。

V9(9;1)1 ■内容：Fは画面左方にいる。C(座位)は中央で右手にブロック片を持って振り、床に打ちつける(7回)；FがCとの中間にあったパズルボックス(P)の上にミニチュアラップを立てて置き、ついで三角のガラガラ(以下三角)、バドミントンの羽根と重ねて置くと、Cは両手で、積み上げたものをPごと引き倒す；Fが「あーっ！」-「あーっ！」と顔をCに近づけると、Cは「うえー」と笑い、Fも「へへー」と笑う；Cが三角を持ち、床に打ち付けたり振ったりする(5,6回)；Fが左手で振りながらリングチャイム(R)をCへ差し出すと、Cは右手でRを取り、Pに打ち付け(5回)、両手の物を1回打ちつける；FがCに「あー！」と働きかけると、Cは「あー」とFを見ながら両手のものを打ちつけ、三角を口にもっていき、何回もRで打ちつける；Fが両拳を打ちつける動作(Cを模倣)(4回)をすると、Cは両手のものを打ち合わせながら「あうう、へへ」と笑い、Rを離し、見て、口へもっていき、三角をRに打ちつける；FがCの動作に同期するよう「う、う、う」と両手を打ち合わせると、Cも打ち合わせながら「うへ、へえ」と笑う；Fが「あ…にやにや」と言い、Cに同期するよう「う、う」と両拳を打ち合わせると、Cは両手のものを口にもっていき；Fが「う、き、か」と打ち合わせる動作をすると、Cは「うー、

へへへ…うううっーえへへー」と笑い、両手のものを離すが、また口に持っていき打ち合わせる；FがCを模倣をして「くあ、くあ」と言うと、Cは「う、ああー」と打ち合わせ、床に置き、かごの方へ這っていく。◆考察：感覚運動遊びとしては、第2次循環反応の遊びが現れているが、親子の社会的遊び(身振りの遊び)もみられている。ここで興味深いのは、Cの動きを模倣したFの行為が敏感にCの笑いを誘ったことである。何故であろうか。一般にこの時期は明確な愛着が形成される時期であり、父親であるFにも明確な愛着が形成されていたであろう。そしてそのようなFからCに頻繁な同調があったわけである。愛着をもった人からの承認がCを楽しくしたのであろう。

2 ■内容：C(座位)は中央にいる；Cが玩具かごをつかみ寄せ、手前に傾け、立方体に棒が差し込まれたビニールブロックをつかみ、床に打ちつける(3回)；FがボールをCの手元付近に落とすと、ビニールブロックに当たって右方へ跳んでいく；Cが叩きつけながら右方を見る。叩くのをやめ、少し間があり「う、ふ(Fを見て大きく)へへー」と笑い、ビニールブロックを床に打ちつける；Fが「へへ」とボールをとり、また落としたボールがビニールブロックの側に止まると、Cは打ちつけるのを一寸やめて「ふふー」と笑う；Fがピistolを持ち、Cの方に向けて「ぱち」と撃つ動作をしてからピistolを指で回して見せると、それを見たCは、叩くのを止め、左手でそれをとる。◆考察：やはり第2次循環反応の遊びがある。また、Fの一つ一つの行為に対する注意の高まりがあり、何らかの新奇な出来事にはよく笑いが出る。この時期は一般にも熟知対象よりは新奇な対象への興味が強まる時期である。笑いやすさは新奇性あるいは変化への敏感さを反映しているように思われる。

3 ■内容：Cが左手にピistolを持っている；Fがかごを持ち上げると、Cはピistolをかごの中へ持っていき；Fがかごを落とすと、Cは「うへえ、ふ、あ、あ、へえ」と笑い、右手でビニールブロックを床に打ちつける；Fがお手玉をかごの後ろに落とすと、Cはビニールブロックを打ちつけ、それが玩具とカチカチ当たる(10数回)。◆考察：玩具かごがどんと落ちたのでまた大きく笑った場面である。遊びについてはここでも第2次循環反応の遊びと変化への敏感さが見られる。

4 ■内容：①C(座位)は左手に赤ヨーヨー、

右手に黄ヨーヨーを持つ。前にはかごがある；(1)FがCの背後からかごに床の上のものをどんどん入れていく-Cは赤ヨーヨーをくわえながら黄ヨーヨーでかごの中を叩き、どちらのヨーヨーも口へ持っていく；(2)Fがロボット、ボール、ボール、毛糸の帽子とかごに入れていく-Cはボールが入るのを見て取ろうとするが、そこに帽子が被せられる。だが、Cはボールを取り出し、口へ持っていきと自ら笑う；(3)Fが「えへへ」と笑う-Cは「へへへー！」と大笑いする；(4)Fがボールを取り、かごへ入れる-Cは「えへへへー」と笑い、毛糸の帽子をとり、「へええ！」とまた笑う。ブロックを入れ、小球を入れる；(5)Fが棒を入れる-Cはそれを見て「へへへ」・「うーふふふ」と笑い、かごに手を入れる(6)Fが「ほい、ほい・・・」ラッパや落ちているものを次々とかごへ入れていく-Cはハーモニカを取り出し、床に打ちつける-Fはどんどん入れていき、最後にパズルボックス(P)をどんと入れると、Cが「えへへへへーへーへー、えーい、えーい」と大笑いする；②Cがかごを引き(一瞬傾く)、左手のヨーヨーでPを叩き(4回)、上を見て「あーふ」と一段落する-Fが注意を引くように「あー」と言う-Cは「うへへへー」と笑う；Fが「ふひゃ」と声をかける-Cは「へーえ」、「へへへ」と笑う(左手のヨーヨーを口にやっている)；Fが「パン！」と唇で音を出す-Cは左手のヨーヨーをくわえ、右手のハーモニカで床を打ちつける；(10)Fが何回か唇で音を出す-Cは「んへえ」と笑い、Fを見て、左手をかごの中に入れる；Fが唇で音を出す-Cは無反応；Fが唇で音を出す-Cは「んーん」と笑いながらハーモニカをうち続ける；Fが何かでカチッと音を出す-Cは「んーん・うえーえ」と笑い、ハーモニカを放し、かごの中へ入れ、ブロックを出して叩きつける(3, 4回)；③FがCの動きに同期するよう「ちゃ、ちゃ、ちゃ」と言う-Cは「うへえ」と笑いながら叩きつける；Fがまた「ちゃ、ちゃ、ちゃ」と言う-Cは「へえー」と笑いながら左手のボールを口へ持っていき；Fが小さく連続して舌鼓を打つ-Cは右手で持ち替え「あははー、えー」と笑い、ボールを口に持っていき；(17)Fがまた小さく舌鼓を打つ-Cは「ういー、あう」と笑う；(18)Fが「ぼん」と声をかける-Cは「えへへー、えー」と笑い、ボールを落とし、毛糸の帽子を取る；Fが「ちゅ」と声をかける-Cは「うへへ」と笑う；④CがP

を掴み取ろうとするが、重くて顔に当たって落ちる。3, 4秒後「う、あーあ」と苦痛の発声がある；Fが「へへ、いたかった、いたかったねー」とCの背中をさする-Cは「うひひ、うんぎー」と快の発声-Fが「いたかった」と背中をぼんと叩く-Cは毛糸の帽子とピストルを取るが、どちらも放す「××」；Fがハーモニカを取って吹く-CはFを見て、口を開ける-Fがハーモニカを吹き、置き、左方奥を見てから手前を向き、右手で帽子を振る-Cはハーモニカを見つけ、口に持っていき-Fが「ふーっ！」と声をかける-Cは「うは、あうあ、はうはえー」と大笑いをする；Cがハーモニカを床に打ちつけていて自分の足にも当たる-Fが「いたいよー」-Cはハーモニカを振り、落とす-Fが「うーっ！」-Cは「へえへへ、あうー」と笑う；Cはハーモニカを口に持っていき-Fが口笛を吹く-CはFを見て「えーっ！」の声。

◆考察：長い記録なので①～④に分けて考察する。全体に第2次循環反応の遊びが見られるが、これは以後いちいち指摘しないことにする。①の(2)でCがボールを取りだして自ら笑ったのは気になる行為である。最初かごにボールが入られ、それを取ろうとしたが、毛糸の帽子が被せられたので一寸妨害されたわけであるが、すぐボールを取り出すことができた後にその笑いが出た。すると、当初の目標を達成した(隠されたにも関わらず見つけだした)という嬉しさがその笑いであったのだろうか。対象の永続性の認識とも関連があるだろうが、Cの目標追求力の高まりを感じる。(4)～(6)ではかごに物がどんどん入れられて行き、最後に大きなPがどんと置かれた。散らかす遊びをしてきたCにとってこのように物が次々と一つに集められる光景が印象深かったのであろうか。あるいは、単にどんと置かれた光景が印象深かったのであろうか。②唇で音を出す遊びが見られたが、Cの笑いは他の音でも引き出された。Cの笑いは、その音自体の面白さというよりもそこに自分と遊ぼうと関わってくるFがいることと関連が強いと思われる。③の笑いも同様で、Fの同調が楽しいのだと思われる。④Cがハーモニカを口に持っていった時、Fが「ふーっ！」と吹く音を出したことはCの大笑いを引き出した。そのタイミングのよさが面白かったのかも知れないが、FがCのすることに関心を持っているということがうれしかったとも考えられる。なお、ハーモニカを吹こう

としたのは機能に適切な扱い方であるが、少し前にFが示して見せたことである。

V10 (9 ; 21) 1 ■内容：Mが小椅子を叩いて注意を引くと、Cは小椅子を右手で掴み、ぐいぐい引き寄せ、画面左（カメラ、Fがいる）を見て笑顔になり、「いーあっ」（身体のバランスがやや崩れるが戻る）；Cが握りを逆手にして小椅子を引き寄せ、部分的に少し持ち上げ、床に打ちつける（4回）；Cがぐいぐいと引き、左手で持ち上げ、両手で掴み、Fを見て「いあー」と笑顔になる；Cは椅子を両手で打ちつけた後、手を放してFの方に行く。◆考察：小椅子を4回床に打ちつけたのは第2次循環反応の遊びと見られる。

2 ■内容：①画面右でCがカーテンの下部を持ち手元に引いたり戻したりして座っている（起きあがりこぼしの音がしている）；Mが「いない、いない、いない、いない」-Cはカーテンから少し顔が出る-Mが「ばあ！」-CはMを見て「うあっあ」と笑顔になる；Cがカーテンを引く（顔が隠れる）-Mが「いない、いない、いない、いない」（もう1回反復）、「ばあ！」-Cがカーテンを放す-Mが「ばあ！」-Cがカーテンの下を見ている（起きあがりこぼしが音を立てている）-Mが「ばあ！」-Cがカーテンを引き（顔が隠れる）、また戻す（顔が出る）-Mが「ばあ！」-C「えーえ」とMを見る-Mは「ばあ！」；②Cが左手で起きあがりこぼしを動かしている様子（音がしている）；カーテンの下から起きあがりこぼしを取り、両手で持って上下に振る（5回）。また床（6回）や足（1回）に当てる；いったん放してからまた取り、両手で上下に振る（6回）～「う、う、あ、あ」の発声がある；起きあがりこぼしを抱えたまま下の方を見て「あああ」という発声があり、ぼろんと落とすと、それを左手で後ろへ引きやり、Fの方へ行こうとする。◆考察：①Cの行動には二つの解釈が可能であろう。一つは、Cがイナイナイバアのつもりでカーテンを引いたり戻したりしていたというもの。もう一つは、Cがカーテンの下で音を出している起きあがりこぼしに興味があり、探そうとしてカーテンをいじっていたというものである。Mは前者の解釈をとって声をかけたか、あるいは前者の行動になりそうなのでそれに誘おうとして声をかけたかのいずれかであろう。いずれにせよMには遊ぼうとする意図があったと見られる。しかし、CはMの声がけには気づいているもののM

の相手をしようという様子は稀薄である。これがイナイナイバアであれば「顔の遊び」になる。

②どちらかという、Cの興味は起きあがりこぼしの方であったかもしれない。起きあがりこぼしを手に入れてからは何回も振ったり叩きつけたりして音を楽しんでいた。これは第2次循環反応の遊びである。

3 ■内容：Cがカーテンのあるガラス戸に寄りかかって座っている；頭を後ろに打ちつけ（3回）、（間をおいて）頭を後ろに打ちつけ（最初空振り、後2回）、カーテンを右手で掴む。◆考察：カーテンに頭を打ちつける行動については、頭への感触を楽しむ要素もあったであろうが、頭を打ちつけることで窓ガラスに生じる変化を楽しむ第2次循環反応の遊びであろう。

4 ■内容：Cが低いテーブルに左手をかけテレビ台に右手をかけて立つとテレビの方へ寄り、映像を見ながら右手で画面をペタペタ叩く（10数回）。◆考察：Cがつかまり立ちし、テレビの画面に興味をもっている場面である。リラックスしているなら遊び、緊張しているなら探索であるが、前者の性格が強いように見える。画面を繰り返して叩いた行為は第2次循環反応の遊びと考えられる。

5 ■内容：Mは画面左で中腰の姿勢でいる；Cがカメラ近くにいるFを見つけ、這って近づく。この時「うっ、あっ！へへ」の発声；Fが左手を動かして待つ-CはFの手に手を乗せ「う、あー」、さらに近づき、Fの指を口にもっていきしゃぶろうとして口を開ける。この時「う、うーいあ」、「あーあーあ」、-「はあ」の発声；Cが「はあ」と言ったときFが手をCの顎に当てて上下に振る-Cは「あうあうあう」、「あわわわわ、あわわわわ」の発声。◆考察：ここではCが声を出し、FがCの顎を上下させることで「あわわ」という親子の「声の遊び」が行われた。当初CはFと関わろうとしてその指をしゃぶろうとしたのだが、Fが「あわわ」遊びに誘い、Cがこれに応じた形である。なお、この遊びはすでに長いこと繰り返されてきていて、育児日誌にも「・・・アワワと声を出すのが面白くて前からやっていた。2日ほど……やらなくなったが、今晚やった」とFが喜んでいて（7；15）」とある。

V11 (11；26) 1 ■内容：Cが台所に寄りかかって座っている；Cが「あえっあ」といった快の発声を伴いつつ買物袋の中から出した財布を折

ったり曲げたりしている；Cは少し財布を見てから床にあった空の菓子箱に手を出す；このとき「えーちゃん」といった発声；Cが財布を右手に持ち替え、左手で箱を取り、振る－F（右方面外）はCの動きに合わせて「ちゃ、ちゃ、ちゃ、ちゃ」と言う；Cが床に打ちつける－Fは「とんとんとん」と言う；Cが「あー」と財布を箱に被せる－見て「え、え、えー」－財布と箱が離れ、左手に箱、右手に財布を持つ－財布に触り「りゃりゃ」－財布を放し、箱を両手で持ち、空け口を手をやり中を見ようとする－箱の横を見る。◆考察：財布や菓子箱をいじっているのは探索のようにも見えるが、快の発声があるから、探索の性格の強い「対象操作の遊び」と言うべきであろう。FがCの行為に合わせて声をかけているが、Cは特に反応を見せなかった。

2 ■内容：①Cが右手に車輪つき玩具（以下車輪つきとする）、左手にビニールトレイ（トレイ）を持ち、打ち合わせる；右方のFをみている；右方で何か音がして笑顔になる；車輪つきを床に打ちつける；床を見回すようにし、打ち合わせたりこすりつけたりする；②Fが右方から「ちょうだい」と手を出す－Cは「んはははは」－Fが「ちょうだい」－Cは「んはははは」と打ち合わせる；Fが「ちょうだい、ちょうだい」－Cは穏やかに「はーあ」と車輪つきを渡し、小さくうなづき、Fを見てまた数回うなづく。トレイを両手でねじるようにする；Fが「はい、どうぞ」と車輪つきを差し出す－Cはそれにトレイを被せる－Fが「ありゃ、ありゃりゃりゃ」－Cは「えーえ」の笑い；Fが「はい、どうぞ」と車輪つきを差し出す－Cは左手で取り、口に持っていく；③Cはトレイと車輪つきを打ち合わせる－Fを見ながらしきりに打ち合わせる－車輪つきを見て口に持っていきがすぐに手放す－トレイを持って見る－両手でトレイをいじる；④Cが車輪が回っている玩具を見て取る－口に持っていきこうしてFを見る（笑顔）－Fの手へ差し出す－Fが受け取る－CがFの方を見て2、3回うなづく（笑顔）－トレイの端を口にやりながらFを見て、うなづく－トレイを両手で差し出すようにし、何か見えたように近づけて見る－両手でねじる；⑤FがCへ向けて車輪つきを走らせる－Cはトレイを顔に押しつける－口を当て「あうあうあ」；FがCへ車輪つきを走らせる－Cは車輪つきに気付かずトレイを放し、顔をFへ向け「うー」；⑥Cがトレイを両

手に持ちFに差し出す－Fは「はい、どーも」と手を出す－Cがうなづく－Fが取ろうとする－Cは引く張って放さない－Fが「おう！」－Cはそのままねじろうとする；⑦Fが「どーも」と手を出す－Cは「あっあっ」と笑顔で差し出すようにして、また引き戻す；Fが「はい、どーも」と手を出す－Cは「えいえいえ」の笑い－奥を向き背を背けるようにする；⑧Cは箱に注意し、右手を出す－トレイを放し、右手で箱を掴む－蓋を開けて中を見る；Fが車輪つきを取る－Cはそれに気づき、箱を両手で持ち、中に入れるようにする－Fが中に車輪つきを入れる－Cは（中で車輪が回る音がして）中から車輪つきを取り出し、戻し、取りだす；⑨CがFに車輪つきを差し出す－Fは「はい、どーも」と手を出す－Cが「あへへ」と笑い、奥を向く（渡さない）－Fは「ありゃりゃりゃ」－Cは車輪つきを口に持っていき－Fが手を出す－Cはさらに奥を向く。

◆考察：①Cは車輪つきとビニールトレイの二つの対象を同時にいじっている。②Fが「ちょうだい」と手を出すと、Cは2回ほど笑うだけだったが、3回目には穏やかな発声で相手に渡し、数回うなづいた。「ちょうだい」に対して物を渡し、お辞儀したわけで、これはV10の頃には習得中であった行動である。Fが「どーぞ」と差し出した時Cは受け取り、お辞儀して応えることが期待されている。1回目では、差し出された物にトレイを被せて応じるという意外な反応を示した。物を受け取り、お辞儀することを知らないか、知っているが、新奇な反応を試みたかたのいずれかであるが、「ちょうだい」に対して応じられるのであるから、「どーぞ」に対する応じ方を知らないのは考えにくいところである。もし、後者であれば、単にやりとり遊びができるだけでなく、応じ方が柔軟になっていることを示す。2回目には「どーぞ」に正しく応じている。多少ぎくしゃくするが、これは玩具を媒介とする遊びで、「分担の遊び」に近いと見られる。③①～③を通して見ると、2つの物を一緒にするいじり方と物の多様な扱い方が特徴的である。④ここではCが差し出してFが受け取っているが、Cが差し出す前にF（画面外）を見て笑っているの、Fが手を出していたかも知れない。その場合、いわば「ちょうだい」への反応として渡したことになる。そうでないなら、Cは自発的に差し出したことになる。対人関係における自発性は発達上大きな意義があ

る。Cは渡した後笑顔でうなずき、あとはトレーをいじった。これは「分担の遊び」か「交代の遊び」であろう。⑤FがCに車輪つきを走らせる(2回)がCは気づかない。⑥ここではCが自発的にトレーをFに差し出す。Fがこれに応じようとする、Cがトレーを放さない。Cは自発的に差し出しながらそれを渡さないという意外な反応を見せたのである。これは⑦でもう1回繰り返され(差しだしながら引き戻す)、⑧と⑨の2回では、差し出しながら背を向けるという反応を示した。以上、Cは「差し出して渡す」というパターンを習得していなかったか、習得済みではあるけれども、そのバリエーションとして「差し出すが渡さない」というパターンも習得していたか、あるいは今日偶然に新奇パターンを発見したと考えられる。おそらく、後者の二つのうちのいずれかである。その場合それは自分が予想外の反応をしたときの相手の反応が面白くて行われた「分担の遊び」のバリエーションである。なお、この遊びは麻生(1996)¹¹の言う4つのレベルのふり行為(コミュニケーション行為としてのふり、動作表象としてのふり、記号的行為としてのふり、象徴的行為としてのふり)のうちの最初のレベルのものであり、物を渡すふりをして渡さないなどの「からかい」であるが、楽しい雰囲気で行われるなら、遊びの一種と言える。

3 ■内容：Cが台所下で座り、その奥にFが這い、Cを追う姿勢；Cが「んあ、ああ」と箱を落とし(笑顔)、急いで手前に這ってくる「うはは、うはは、はは」-Fが後を追って這ってくる。◆考察：這いのレベルでの追いかっこである。Fが追う姿勢を見せ、Cがこれに相応しい反応を示した。玩具を媒介としないが、「分担の遊び」に近い。加用によれば、この遊びは状況の二つの極、能動-受動が感じ取れるようになったことを示す活動であり、この遊びを通して自己分化が促されると意義づけた(加用、1983)¹⁴。

結 論

Cにみる遊びの発生と発達

乳児期前半：遊びが見られた事例のほとんどは「声と表情の楽しいやりとり」に該当する社会的遊びで占められた。上記以外の遊びはV5-1の「対象操作の遊び」のみである。遊びの起源の一つとしての直接的感情的コミュニケーションの重要性が改めて確認されよう。社会的遊びの最初の

事例が2；6に見られたことについては対人関係の発達を考慮しなければならない。Mの育児日誌を見ると、「あやすと少し笑うような顔をする(1；25)」、「はっきり笑うようになった。誰でも顔を見せるとニカニカと笑う(2；4)」、「語りかけによく反応するようになった…(2；10)」とあり、生後2ヶ月前後には人からの働きかけを喜ぶようになっていたことが記録されている。対象操作の遊びの事例がようやく5；1で見られたことについては運動発達と関連があろう。育児日誌には「目の前の物、動く物に手をだす(4；6)」、「…(玩具を入れた)籠の中に入っているものをガチャガチャいじったり、しゃぶったり、外に落としたり(する)(5；18)」とあり、生後5ヶ月前後に対象操作の遊びが可能となっていることが窺われる。

乳児期後半：この時期では感覚運動遊び、対象操作の遊び、社会的遊び、玩具を介した遊びのいずれもよく現れ、遊びの種類が豊富になっている。「物での遊び」においては、行為結果への優勢な興味と対象特性への興味の高まりに気づかされる。「人との遊び」は全体によく見られたが、その中でこの時期では優勢化していない象徴遊びへの移行形態を成すような遊びが見出されたことは興味深い。それは、物を渡すかのようにしながら渡さないといったやりとりを指すが、これはふり遊びの最初の現れとも考えられるのである。麻生(1996)¹¹によると、それは本来の目的(条件)のために為されるのではなく、そこから二次的に学習された新たなコミュニケーション機能を果たすために、本来の目的(条件)が欠如した状況でなされる行動であり、例えば「物を渡そうとして差し出すこと」と「物を渡すまいとして差し出すこと」の間でのズレの意識をもってふり意識の萌芽としている。この種のふり行動は生後9～12ヶ月頃に見られると言う。

上のような萌芽的なふり遊びも9ヶ月頃に突然出現するとは考えられない。多少ともふり意識のある遊びの出現にとって初期からの親子遊び経験はどのような意味があろうか。麻生(1998)²¹が遊びは遊びモードにある大人の発達段階に応じた適切な関わりの中でゆっくり獲得されるもの、と述べたことが一つの回答になろう。初期の親子遊びでは、自分が遊んでいると意識しているのは大人だけであり、乳児はそうした大人の行動を楽しく経験しているに過ぎない。しかし、それがいわ

ば遊びの温床となり、乳児自身によるふり遊びを結実させていくのではないかと考えられる。

今後さらに幼児期に範囲を広げて検討を続けて行くこととする。

引用文献

- 1) 麻生武 ファンタジーと現実, 1996年, 金子書房
- 2) 麻生武 なぜ大人は子どもと遊ぶのか? — プレイルームのミラクル体験, 麻生武・綿卷徹編「遊びという謎」第1章, 1998年, ミネルヴァ書房
- 3) Hughes, F. P. Children, Play, and Development. Allyn and Bacon, 1991.
- 4) 加用美代子 乳児期の遊び, 河崎道夫編著「子どものあそびと発達」第II部第1章, 1983年, ひとなる書房
- 5) Piaget, J. La Formation du Symbole chez L'enfant. Delachaux & Niestlé, 1945. (大伴茂訳「遊びの心理学」黎明書房)
- 6) 高橋たまき 乳幼児の遊び: その発達プロセス, 1984年, 新曜社
- 7) 戸田須恵子 乳幼児期の母子遊び, 高橋たまき・中沢和子・森上史朗共編「遊びの発達学・展開編」, 第4章, 1996年, 培風館
- 8) 矢野喜夫 遊びにおける活動の発達, 高橋たまき・中沢和子・森上史朗共編「遊びの発達学・展開編」, 第5章, 1996年, 培風館 (2003.7.31受理)